

『華氏 451 度』 —焚書は憎むべきものか—

安田 こよみ

『華氏 451 度』の作品テーマは一見国家検閲であるように思われるが、テレビ・ラジオ批判である。本書はラジオが普及しだした 1953 年に出版された。あとがきには、作者ブラッドベリはラジオが広く普及することで、視聴者が情報に受け身になることを危惧した旨が書かれている。また、作者が見かけた一組の夫婦について、小型ラジオを片手に持ちイヤホンを耳にした妻は「夢遊病者よろしく、いないも同然の夫に腕を支えられ、歩道の縁石づたいに上がったたり下がったりしている。」とある (p. 291)。この夫婦は作中の主人公モンターグと妻ミルドレッドの描写と重なる。流れ続ける情報にばかり執心し、自分が今接している現実から目を逸らすような環境がラジオによってもたらされた。映画『華氏 451』では、常に部屋の大きなスクリーンテレビを眺め、内容とは無関係のキャスターの髪型や服装にコメントする。流れてくる情報を聞くことが重要なのであって、内容を聴くという好奇心を傾ける行為はほとんどない。この反応は夫との会話にも現れる。夫の昇進 (=昇給) の話には妻は「それは新しいスクリーンが買えるってこと？」と返す。一方モンターグの目の前に突然現れた少女クラリスは、相槌をうち、会話が成り立つリアクションをする。この当たり前のようリアクションを「頭がイカれてる」(p. 16) と自称し、周囲との異端さが描かれている。

『華氏 451 度』における焚書は、端的に言えば「余計なことを考えるな」という統制である。読み・書きは本や文字が禁止されているので存在しない社会。生活に支障が出ない最低限の会話が主体で、スクリーンテレビは視聴者の応答の正誤に関係なく肯定する。与えられる情報に頷いて何も考えずに日々が過ぎていく感覚的な社会をブラッドベリは危惧した。現代ではラジオ・テレビ・インターネットなどが過ぎていく感覚的な社会をブラッドベリは危惧した。現代ではラジオ・テレビ・インターネットなど当時よりも情報が溢れかえっている。インターネットは文字が主体ではあるが、発信者の正誤に関係なく肯定・批判される SNS には、条件反射的に反応するひとの数が増えた。現代はブラッドベリが想像していたより速く静かに、感覚的な世界を形作っているだろう。「もう満腹だと感じるまで“事実”をぎっしり詰め込んでやれ。ただし国民が、自分はなんと輝かしい情報収集能力を持っていることか。と感じるような事実を詰め込むんだ。そうしておけば、みんな、自分の頭で考えているような気になる」(p. 103) と上官が言うように、私達が自分の意見だとする事柄も、無意識に引っ張ってきただけの事実かもしれないのである。情報が溢れかえっているせいで現代は考えることが難しい環境になっているのだ。

焚書は余計な考えを排除する手段のひとつである。万人が平等に、自ら考えることもせず与えられることだけをやっていけば不幸は起きないのだとしている。作中では思想統制がメインであるが、現代においては反対に思想統制としての威力は弱く話題を盛り上げるための起爆剤としての作用も大きいのではないかと考える。忘れられた過去を掘り返す手段とするならば、行為自体は憎むだけの対象とはならないのではないだろうか。日本において焚書が馴染みないおかげで、2014 年の『アンネの日』記破損事件における各国の反応や、日本国内でも歴史に再び触れる機会を国民にもたらした。「焚書」という行為だけを見て善悪を決めつけてはいけぬ。その背景にあるものや、もたらされた効果によっていかに世界が動いたかを考える必要がある。その思考こそがクラリスの持つような好奇心的思考であると考える。多角的に見ると、ひとを思考させ過去を掘り返させる焚書は、一概に憎むだけの対象とはならないと考えられる。

(指導教員 中村 敦志)